

## 豊島美術館

正会員 西 沢 立 衛 君

「新しい建築」の出現を祝福したい。

建築とは自然環境のなかから人工環境を切り取るものであるが、切り取られた人工環境が新しい自然環境をつくるような不思議な循環を感じさせる建築である。圧倒的な空間だ。ぽかりと口を開けた開口部から大量の大気が流れ込み、内部空間にいながら意識は外部空間に誘われる。しばらくこの内部空間にいと、無造作に切り抜かれたようにみえる開口部から入る光の量や眼の移動によって変化する外部の情報などが適切にコントロールされていることがわかる。薄いシェル構造の大きなワンルームの空間であるが、そのライズが押さえられているので適度にこの薄い躯体からの圧力を感じる。流れるような自由曲面によって構成されるこの空間は、変化していく形の瞬間を固定したように感じられるのだが、この自然現象のような空間はこれまで私たちが経験してきた建築とはあきらかに異なる。これまで不定形の建築は必ず幾何学に置換され、解析され、施工されてきた。それは、建築における幾何学というものが人間の意志を表象していたから、建築が幾何学から切り離されることはなかったのだ。この建築はそのようなこれまでの建築とは成り立ちがまったく異なっている。

構想されてから実現されるまで7年間という時間から、この建築が世界に出現するまでの困難が推測できる。作者は大きな不安の中で計画を進めたに違いない。出現した建築は人工的な躯体面を環境に露出させている。それはこの建築が人間の意志が構築した新しい自然であるという主張であるのかも知れない。この豊島美術館を訪れると、土に埋めた小さな〈チケットセンター〉に迎えられる。その先に〈カフェ&ショップ〉が見える。このふたつの建物は破調でヒューマンだ。〈アートスペース〉にはそこから直接アプローチすることは禁じられ、ぐるりと小山を廻って周辺の棚田や瀬戸内海の水面という周囲の環境を吸い込んだ後、この道行のような作法で導かれる。サイトスペシフィックなアートを企画したクライアント、その空間を構想する建築家、その空間に呼応する作家、その空間を実在させる技術、時空間の中でそれらが交差する幸運な一点がこの建築を出現させたように思える。

設計者はこれまで2度の日本建築学会賞（作品）を共同者として受賞しているが、この豊島美術館ではその前2作品とは異なる新しい建築概念が提示されている。まさに時代を画する建築がここに登場している。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。